

清流

題字：芳野 充

令和6年1月30日

第85号

発行所 加来不動産(株)

発行者 加来 寛

北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに

静かに

清流のように

「何も無い日」が有難い

二〇二四年がいよいよ始まりました。個人的に辰年のイメージは、派手さがあり何となく縁起も良い印象をもちます。しかし元日早々から衝撃をうけたのは、わたしだけでは無いはずです。

震災による火災や津波のニュースがながれ、また次の日は羽田空港で飛行機同士の衝突映像がテレビのどのチャンネルでもながれ、三日は小倉市街の食堂街が大規模火災になり、けたたましいサイレンがひびきました。

正月とは、当たり前のように初詣にいき、当たり前のようにおせちやお酒を味わい、当たり前のように親族や親しい人と年始のあいさつをかわす。そんな「当たり前」がもろくも崩れさった印象をもちました。

わたしは毎日朝起きたとき、夜寝る前に感謝の言葉を口にしていきます。朝の感謝の言葉は「今日、目覚めることができました。ありがとうございます。和六年●月●日。今日の一日、大切に過ごさせていただきます。今日は素直な心で生きていきます。謙虚な心で生きていきます。明るい心で生きていきます。正しい心で生きていきます。おだやかな心で生きていきます。今日のわたしは、昨日のわたしより成長します」。

「からだのどこも痛くありません」とは、仮にからだのどこかが痛んでるためです。

寝る前の感謝の言葉は「今日一日無事に過ごすことができました。無事に過ごせた日が最良の日です。良いことをのぞむことは欲深いことです。ありがとうございます」

「良いことをのぞむことは欲深いこと」とありますが、「良いことがあれば良い日」「良いことがなければおもしろくない日」と区別するのはなく、何事もなく無事に過ごせた日が有難いと思うようにするためです。

当たり前のようにトイレでレバーを押せば水がながれ、スイッチやリモコンひとつで部屋は明るくなり暖かくもなる。家族と何気ない会話をしながら食事をし、おふろにつかり、ベッドでゆっくり休むことができる。この何も無い当たり前の日が、じつはどれだけ有難いことか、と痛感させられた年明けとなりました。

今もなお、言葉では言いあらわせないつらい環境に身をおいている皆さんの方々に、いまわたしができる最大限の支援をおこない、一日もはやい復興を心から願いつつ、何も無い当たり前の一日一日を大切にしていきます。

加来

